

2. 討 論

矢幡報告について

○ エノキダケの経営の経過と概況について、説明して欲しい。

矢幡 わが家は、梅と栗を町の中では一番大きな規模でやっていた。私が就農した年に、かつて経験したことのないような遅霜があった。1年1年規模を拡大し期待していたところに例年の2割作という大打撃だった。

これがきっかけで、新たに取り組むべき作物はなにか、調査を始めた。隣の日田市だけで、製材所が220あり、オガクズの処理に困っていた。ただの原料なら損をすることはないだろうと、キノコに目をつけた。作ることは自分の努力でできる。キノコがこれからの食生活に向けたものであるか。流通の方はどうなのかの問題が先だ。

そこで、小売店とか、市場の関係者を訪ねた。小売店の方は、今後伸びる分野だ、菌タケ類は伸びると言うが、市場の方は、否定的だった。キノコは長野県が大産地で、九州の9割以上のシェアを占めていたからだった。「長野県よりもいいものをつくることはもちろんだけれども、コンスタントに毎日、信用のおける商品づくりをしなければだめだ」と言われた。この言葉が印象的だった。

キノコを始める前に、中学校に出かけていった。卒業生のうち、大阪で成功し20代で部下を持っている、しかも次男、三男坊という条件の人を求めた。3名紹介してもらい、大阪へ出ていった。それぞれ個別にあって、「実はキノコを始めたい。帰ってきて、一緒に取り組もうじゃないか」と口説いた。こうして1人の青年を仲間に引きずり込んだ。

キノコづくりがスタートした。本業は、まだ、果樹だった。副業の気持ちで取りかかったが、そんな生易しいものではなかった。大変な思いして、軌道に乗った。すると、周り

から「私にもやらせて」と言ってきた。どうせ産地化をしなければ、自分も生き残れない。知り得たノーハウを、全部提供することにした。7名が私の周りでキノコをするようになった。

ところで、うちの町は、一貫して企業誘致はしないという方向で、村づくりを進めてきた。それで、男子の就労場所がなかった。希望者は皆雇ってきたので、今、男子15人を雇っている、おばさん方を含めて、全員で35名である。

キブツという共同社会にも足を踏み込んだ経験もあり、超近代的な経営をしてみたかった。全員の持ち株制度にして、年間の給料は、20カ月分支払う。2年に1回は、海外に旅に出る。これを基本にした。

農業は、1本の柱では危ない。1本が軌道に乗ったならば、速やかに2本に、できたら3本足の経営にしたい。それでも人が多くなり、年間20カ月のサラリーを払うには、足りない。現在、5本の足で経営している。1本ぐらいつぶれたって、大丈夫だ。おかげで、私が余りタッチしないでも、何にも心配のない経営になってきた。

うちの社員たちは、農協の指導担当と同じように、160戸の農家巡回指導などやっている。

これからは、農業のみにとらわれずに、農外のことも、取り組んでいながら、農家経営の改善を図っていかねばならないと思う。

25年ぐらい前から、世界じゅうを飛び歩いて、うちの町は、いろんなノーハウもため込んできた。これを活用して、世界じゅうとネットワークづくりをしながら、新しい産業に取り組んでいきたいと考えている。

○ キノコ経営が広がっていく過程を、もう

少し、そこでの苦労など。

矢幡 周りの方々と同じことをし、所得の面でも、生活の面でも、同じだったら、田舎というのは、だれもが優しくおつきあいしてくれる。ただ出るくいは打たれる。そういう一面はこれは農村に限らず、職場でもどこでもあろうかと思う。

キノコをやるに際して、自分の持ったノウハウを周りの方にオープンにして、地域づくりを進めることを基本にしてきたとはいえ、やはり初めは、お互い疑心暗鬼の状況もあった。

7人と私との関係が、1年たち、2年たち、そして彼らの所得が伸びてくると、心配事は言わなくなった。

次には20人、30人の方が「私たちにもノウハウを教えてくれ」と飛び込んできた。行政があればだけのエネルギーをかけ、「梅を植えましょう」という運動をしても、なかなか乗ってくれない農家の人がいる中で、実績を挙げて示せば、指導も何も要らない。もう農家みずから飛び込んでくるという体験をした。

行政から、莫大なエネルギーを費やしてするよりも、中から興った産業は力強い。だれかが実績を示さねば。その役目は、本来、農村では篤農家だが、昔の篤農家は、一匹狼的で、人には教えない。私は、篤農家でも何でもない。自分がオープンにしないと、自分もつぶれる。それで私も救われた。正解だったと思っている。

○ こうした問題で、行政の役割はどうか。

矢幡 行政の役割は大きい。力のない農山村に行けば行くほど、行政の力は必要だ。

行政の大きな役割は、一つは皆に必要な情報を流してあげる。もう一つは、流通に乗せるための社会資本の整備だ。

町づくりそのものが、付加価値をつけることだった。大山町でつくったものは、よその産地のものよりも、2割も3割も高く売って

いる。それが当たり前のようにもなってきた。二十数年そういう運動が続いている。

今までは、行政の役割はそういうことでよかった。今後は、行政の役割の中で、地域に文化的な面をどう取り組んでいくかに期待している。これには、無限にいろんな可能性がある。例えば、うちに35の集落がある。一つずつ文化的なものを張り込んでいく。すてきな美術館であったり、音楽に関することであったり。それも地域にあったものを。

消費者の方々が我々のものを見て「あ、物だけじゃなくて、こういうすてきな地域の、ああいう文化的な施設があった町の産物か」と。そこらあたりが、これから行政で取り組んでほしい。まさにこれからの社会資本の中で、一番大事な一面のような気がする。

○ 大山町では後継者問題はないのか。

矢幡 ほとんどは、後継者がいる。30年をワンゼネレーションに考え、我々のおやじたちが梅と栗で町おこしをした。次の世代に、我々がそういう果樹をもう1回とらえ直して、キノコを興したり、軽薄短小のいろんなものを興してやってきた。

さて、我々の子供の次の世代は何をなすかだ。世の中は常に変化する。それに対応しなければ、農村で住んでいけないと思う。キノコも、始めてもう約20年。世の中で20年もそれでイージーに食っていったということは、珍しいことじゃないか。

次の世代は、新しい生き方を当然考えなければならない。イスラエルのキブツに毎年3名ないし4名の青年を出していて、60人を超えた。その青年たちは、あらゆる意味で、やはりうちの町の核になるだろう。

ただ、僕らもそうだったし、20代の青年の人に何かやろうと思っても、やれる力が、まだ乏しい。本人たちが本当の力を発揮するのは、嫁さんをもって、子供ができて、社会的な責任が生まれて、自分たちの生活をじっくり考えるようになってからだろう。責任

ある行動ができるのは、30代になってからではないか。20代のときには、30代でやっていくための幅広い見聞を広めて、しっかりした基礎をつくらなければいけない。そういう意味では、私たちも彼らとしょっちゅう、話し合いの場を持っている。自分たちが、何かやらなければいけないという気は、みんな持っている。ただ、自分たちよりも少し上の人たちが、何もかも町の中ですごいことをやっていくから、やれる分野が少ないとも言っている。いずれ、彼らがうちの町を動かす時代が、もう目の前に来ている気がする。そんなことで、今のところはうちの町は、後継者の問題とかで頭を痛めるような状況ではない。

むしろ問題なのは、みんなが自立経営者になってしまって、人を雇うことができなくなったことだ。外国人労働者のことも考えないと、やっていけないようなところまで、きたのではないかな。

島添報告について

○ グリーンヒル ATO の位置づけはどうなっているのか。

島添 まずグリーンヒル ATO の発足の経過から。船方農場の牛乳価格がどんどん下がって、どういう方向で打開していくかということで、高付加価値、高く売ろうという発想だ。さらに、新しい新たな需要を創造していかなければ、生き残れないんじゃないかという発想が出てきた。そのためには消費者と直につき合う。直接に情報を収集することだということになった。

当初、グリーンヒル ATO をつくったときには、今みるくたうんに入っている加工、流通の部分もすべて含めた。先ほどの矢幡報告のように、話を進めていくうちに、流通、情報の部分と、消費者に直に対する交流の部分が予想以上に大きなウェートを占めてきた。そこで、交流の部分をグリーンヒルに残して、情報、流通加工の部分を新たにみるくたうん

という形にして設立しようということになった。

○ 地域農家と船方農場とのかかわり方はどうか。

○ 船方農場に調査に入ったことがあるので、代わって答える。

農場の経営目標として、10年ほど前から地域複合化を進めている。しかし、実績として、必ずしも地域複合は実現していない。それは、多分地域の農家との調整がうまくいかないからだろう。今のところは、農家の稲わらと堆肥の交換とか、機械の作業受委託等にとどまっている。農地の貸借を通じて畜産と稲作の複合というところは、まだまだこれからやるべき課題として残っている。

むしろ、都市の消費者との交流の方が、スムーズに進んでいる。

○ 農場の後継者問題はないのか。

島添 現在、船方農場では、後継者問題はない。後継者は、社会に求めるという方針だ。別に募集はしていないが、毎年1、2人、農家の方も、非農家の方も含めて、地元の方も、県外なんかからも応募がある。人手という意味では困っていない。

今の構成員は、船方総合農場でグリーンヒル ATO、みるくたうんを含めて、平均年齢が40歳を切ったと思う。一番下は、16歳の女の子。この子は、農業がやりたくて、農業高校に行っていたけれども、高校が荒れている状態で、自分の思ったことができない。人づてに船方農場のことを聞いてやってきた。

本当に農業がやりたくて、自分のうちは農家じゃなくとも、自分は農業をやりたいとか、農業ということじゃなくとも、自分は花が好きだから、花を育てたいという気持ちで、いろんな方たちが集まってくる。

ただ、この5カ年計画の中で挙げている担い手は、役割分担ということだ。家族経営の農業の非常にいいところは、60、70のおじいちゃん、おばあちゃんでも、10やそこら

の子供でも、みんなそれなりに自分のやるべき仕事、やれる仕事があるところだ。

今度は家族という枠をもう少し大きくして、農場の中の仕事を、すべての年齢の人たちが、担えるような組織づくりをしていきたい。

○ テーマのなかで使っている「0円リゾート」の意味を。

島添 これは船方の社長の言葉で、リゾート開発と単純に言うと、多額の投資をした、しかも企業主導型がイメージされる。それに対抗して、安心して生活できる場、たとえば休日だけでもやってきて、安心して生活できる場、のんびりと過ごせる場、そういうものをリゾートととらえた。

きれいなホテルをつくって、アスレチックをつくってというものではなくて、人づくりの部分、ソフトの部分から始めて、できるだけお金をかけない。既存の自然であるとか、村の人たちの人間関係もフルに利用して、施設に頼らずに、ソフトの部分でのリゾートがつかれないだろうか。もちろんただで何事もできないから、全く0円というわけにはいかないが。

○ みるくたうんの設立で株主募集など、どういう人たちを糾合していくのか。

島添 半分は地元の人。農家も、非農家も含めて、この趣旨に賛同する人たちを1口5万円で、2口から10口ぐらい集める。既に、予定の倍ほど集まった。地元とのコンセンサスがとれた感じだ。

残りは半分は一般の消費者。ニューメディアを使い、宅配システムのユーザーになってもらうという考えだ。株主ユーザーだ。1万人ぐらい集まったらすごい。大体のめどはついている。

大口の株主は、発起人で、何千万円単位という出資はない。

みるくたうんの担い手である発起人について述べる。山いもの会は、阿東町内とその周辺も含め、町内の異業種交流会だ。メンバー

は地元の造園業者、町内のスーパー経営者主、町外の建築士、山口市の文具店経営主など含んでいる。それぞれ、多少の利害は絡んでいるが、理念の一致というところが大きいだろう。

それからリゾートの対象は、3歳児ぐらいから小学生ぐらいの子供を連れたニューファミリー。牧場だから、牛がいたり、羊がいたりする環境の教育的な効果大きい。本物を知ってもらうには、できるだけ小さいうちがいい。それと、グリーンヒルATOの方では、バーベキューをやっている。そちらの方のお客さんは、余裕ができた50代から60代ぐらいの方たちで、団体でやってきている。こういう人たちも、自然のあるところが魅力になっているのだろう。

○ こういう活動を進めるに当たって、ご自身で困った問題があれば。

島添 地域に入ったときに、当初はなかなか町内の人たちの表面しか見えなかった。奥のところがわからないと、さきに進めない。多少しんどい思いをした。

個人のことで、ずうっとこの仕事をやっていきたいという気持ちがあって、子供が生まれたときに、背負って会社に行けるかなという心配がある。でも、それが実現できる会社でできたらいいという気持ちだ。

中島報告について

○ 日常的なことでの村の人たちとのつき合いについてはどうか。

中島 その地域でうまくやっていくという前提で、いろんな催し物に係わっている。普通の都会では想像できないようなことがある。檜原村は、火葬、土葬、どちらでもいい。うちの集落は、6軒で、どなたか亡くなると、お墓を掘らなきゃいけない、そういうことから始まる。また、水の問題がある。水道が完備されているが、各集落に任されて管理されている。1年に数回は使役がある。それから

お祭り。

私は、土曜、日曜が休みで、大体自治会活動その他もろもろでも積極的に出ている。そうした活動の中で、環境公害を第一に考えている。教育面で村民のレベルを上げていくことが非常に大事だ。美的センス、これは都市でも同じだ、色の感覚であるとか、物が自然にマッチしないという状態がかなり出てきている。例えば看板、ごみ箱、トイレとか。せっかくすばらしい自然のところに、どうしてああいうプラスチックのものををつくるんだらうか。

自然の素材を使って、例えば木でトイレをつくりたくとも、補助が受けられないので、結局は市販のプラスチックのトイレができてしまう。今後、看板を含めて統一化に改められたらいいと思い、数年前に村会議員の方に、外国のものを見てはという話をした。スイスだとか、いろんなところを見て、それでいいものだけを吸収すればいい、研修に行ったらどうかと。実際にはまだそこまでいいない。村にはそんな非常に汚い自然がだんだんふえつつある。これは、早く手を打たないといけない。

村おこしは、やはり何項目かに絞って、アピールさせなきゃだめじゃないかな。そのほうがよそに対してのアピールするのでは。商工会であるとか、役場であるとかが村おこしをやると、ある人だけ非常に利益があがるということではまずいので、何となくさらっと浅いものしか発想が出てこない。

廃校になった学校があって、この学校を使って、もう数年前から、都内の劇団がけいこ場に使っている。劇団の方たちは、子供のための「ちびっこ太郎」という芝居をやっている。ところが採算性が悪い。団員の中には、渋谷で地下の穴掘りをやって、寝るのは檜原村まで帰ってという状態。劇団を経営していくのに、金銭的にも困っている。できればこういうものを採算ベースに上げていってみた

い。

何かイベントというのは、みんなで肉体労働でドーッとやってみるとできるが、2回目というとな、がくっといってしまう。イベント屋さんのプロにお願い、資金はどこから集めてきて、毎年同じようなパターンに入れてしまわないと、長続きしないと思っている。

自分の今の生活に対して、夢の実現、将来の姿の実現の可能性というのは必ずあるんだということが大事だ。「卑弥呼幻想」の場合には、最初は、500人ぐらい集まれば十分じゃないかというのが、村役場の考えだった。それをはるかに超えて3,000人以上も集まった。村民のあいだではどうして人が来るんだらうという考えがかなり出てきたようだ。チャレンジしてみると、何か起こるということを感じとってもらえた。それから人間というのは、皆さんのペースをみると、300年も生きられると考えている。生きても80年から90年。寿命の先のないことを考えると、座っているのはもったいない。やはり発想を起こさせなきゃならないのかな。

欲張りというのは、何か非常に悪い発想で言われるが、やっぱり欲を大きく持たないと実現できないということも説いている。この辺でも、檜原村の人たちも、頑張ってみるという気が、かなり出てきたような気がしている。これは、外から見ているとちょっとずれるかもしれないが。

「卑弥呼幻想」については、約300万円かかった。宣伝費として150万円ぐらい消えてなくなった。やはり、そこで利益を上げるのでなしに、檜原村のすばらしい自然をPRしようということで効果があった。

最初、やろうという話をしたら、やはりみんなマイナス発想が多い。「赤字になったらどうするの」、「我々加わった人間が全部で負担するんじゃないの」と。「それじゃ、発起人が払うからいいじゃない……」とやって、何か自分で引っ張っていった。やはりいろん

な人にいろんなものを見せてやるというのが非常に重要だ。話をしているより、物を見せて、それでついてくるとというのが普通だろう。そこまでいかないと、人はなかなか起き上がらないということがよくわかった。

○ 環境問題についての具体的な提案は。

中島 檜原村は、非常に面積が広くて、私有林がかなりある。今、杉の林はよい値で売れないので、手入れも何もしなくなっている。将来どうになってしまうのか。1坪ずつでも皆で買い取って、ほかの自然破壊が入ってこないようなエリアをひとつつくってみたいような気がしている。そこで、自然を破壊しない程度の開発はしながら、みんなで憩えるような場所に。

檜原村の活動の中で、檜原山の会というものをついた。会員数はすごく少ないが、土曜日、雨の日、檜原村の中のハイキングコースに出発している。昔の村民が使った、廃道になっている道路がかなりある。その辺りを、なたとのこぎりとチェーンソーを持って山の中を歩いて、ハイキングコースを直している。主要なところには、バスの時刻表など張りつけて。檜原村の人にはなかなか参加してもらえない現状だけれど。

○ この点に関して、檜原村に調査に入った者としての感想を一言。

今言われた都会人がチームをつかって、山の道を直すとか、あるいはまた1坪運動というようなことは、非常に大きな将来性があると思う。それはどういうことかということ、東京都内だということ。東京人に金も暇もあるし、東京都自体にも金がある。何でもやれると思うが、何をどうやったらいいかわからないという状況じゃないかな。

あの空間は、ほとんど今まで知られていないという点で保存されてきた。そのことは大変いい、これから急激に、あそこへいろんな人が入っては困ると思う。中島さんにご苦労いただいて、余り急激に破壊が進まないよう

にしながら、少しずつ手を入れていけば、東京都民にとっての貴重な緑の空間になるし、地域の振興にもなる。今までの農業振興はうまくいかないかもしれないが、私は、あそこはこれからの新しい農林業がつかれる地域じゃないかと思う。

ただ、それは、かなり設備投資が要る。それも、やる人が村の中でいなければ、多分よそからかなり呼び込めるんじゃないかな。

加賀谷報告について

○ 秋ノ宮地区は、山間で、保守的で複合経営が進んでいるということだが、保守的なところで、複合経営が進んでいるという点をもう少し説明して欲しい。

加賀谷 保守的なということと言ったのは、経営の取り組みに対する保守という意味ではない。山林地主というか、山村というのは、そういう形で長いつながりを持ってきた地域だ。

確かに秋ノ宮イチゴをつくる。そういう山村をつくったというすばらしい一面もあるが、一般的には、今までの型を破るのには非常に抵抗がある。秋ノ宮イチゴの場合であっても、孫に小遣いをやれる、組織が確立する、潤ってくる。先ほどの菅さんも、言ってみれば、その地域における親方だ。

だから、技術は非常に革新的だけれども、組織上からいけば、そういう方がトップに立てば、すんなりいくといった形を持っている。そんな意味を含めて、地域、歴史と同時に、そういう入り方のときにあらわれる保守という言葉を使った。

○ 若い人たちはずいぶん町外へ出ていると思うが、彼らが何を望んでいるのかについて、教えて欲しい。

加賀谷 去年の3月、私の近くの高校に300人の卒業生がいた。その中で就農したのは1人きり。それも、お父さんが体が弱いので、よそにやれないということで押さえた。そん

な意味で、今、若い人方の志向は、農業の厳しさ、将来性、そういったものばかりでなくて、今いる自分たちのふるさとをちょっとでも離れてみたいというのが、答えとして返ってくる。

キブツまでは行けないかもしれないけれども、東京までは行く。そういう感覚がある。

私の地域から東北大学に入るということは、かなり優秀な人だが、東京に就職して管理職になった。子供さんが2人いる若い人だけれども、去年、突然帰ってきた。Uターン。

ちゃんとしたところに就職をして安定していたのに、何か落ちつかない。人間同士で生きていくに、都会で値するだろうか。土地を買って、家を建てて、子供を育てて、そういったことをずうっと考えてみた場合に、離れてきたふるさとの方の山や川に、思いをした。親御さんは、抵抗があったが、親子4人で帰ってきた。今は専ら食用菊をつくったりしている。そこの地域にいる仲間と一緒に真っ黒になって働いて、自分たちの日常的な記録みたいなものをまとめながら、親子でふるさとに生きる、そういう気概で、やっている。これは全くまれな例だ。

しかし、盆、正月に就職した若い人も来てよく話すが、親の面倒を見なければならないとか、住むに値するところは、やっぱりふるさとの方じゃないのかなということになる。ただ、それに至るまでは、自分自身の考え方の変化なり、条件が整っていない。

ということで、あれやこれやを見聞して、つき合ってみると、非常に影響するのは、地元で頑張っている同級生、後輩、先輩とか、そういった者たちとの交流だ。今起きている問題は、農業が大事だとは言われながらも、秋田県の場合には、所得農業依存度、家計費に占める割合が27%ぐらい、そんなことで、今ははざままで揺れていると私は見ている。

だからこそ、今どんな小さな芽でもいいから、あるいは1人でやっているのでもいいし、

グループでやっているのでもいいし、集落ごとでやっているのでもいいんだから、何らかの明るい面を拾い上げて、PRもし、点から線へという形の運動みたいなものをやっていかなきゃならんじゃないかな。

約30%の転作面積を抱えていると、米の減収分を何でとるのか。土地を有効に利用して、新しい産物をつくる。物によっては加工する。そんな形でやっていかなきゃならない。農家の努力は、本当に涙ぐましいくらい。

ただ、その農業生産を担当している実際の戦力は、農業者年金をもらっている層が大方だ。さっきの例のように、農家のお母ちゃん方だったり。

これから農協の果たす役割は、そういった農家を見据えて、グリーンサービスのような受委託も含めた生産組織のあり方、あるいは親類、同級生、非常に多様化した取り組みのあり方を整理する。そして農協がそこに割って入ってやっていかなきゃならない。そのときに、出ていった農家の若い人が、一日も早く帰ってこられる条件ができるのではないかな。

全 体 討 論

——地域での合意、都市側との連携、支援組織のあり方をめぐって——

○ これまで4人の方の報告では、先進的な地域で、しかも具体的な話として、その中でも有能な方々の取り組みの話が中心だった。そこを一人一人の住民、集落の人といったところに話をおろしてみても考えた場合、例えばリゾート開発にしても、どういう合意がなされているのか。また、それに対する都市側、活用したいと考えている側の方の欲求とが、どのように調整されてきているのか。

矢幡 私の町は、過去30年近くにわたって物をつくって、それをうちの町づくりの情報と一緒に乗せて、消費者に届けている。あの町はど田舎の町だけれども、常によその地域よりも、何年も早く動きを始めていく地域

だというような目で、見てくれていると思う。

ただ、つい最近、今のリゾート開発で、町にゴルフ場をつくるという話が出た。これはうちの町づくりの理念と、全く相矛盾する面がある。ゴルフ場は、今公害等の問題で、各地で問題にされているし、現にゴルフ場をつくって、その被害で頭を悩ませている地域も、目にしている。

当然、我々はゴルフ場建設に反対して、住民運動をしている。行政のトップから見ると、自分の行政をやっている間に、やはり何か残したいという気持ちがあるのだろうか。

うちのような町づくりをしているところから見たら、たとえ個人の私有地であっても、公共的な意味が大きい。地域に住む方々が、これはおれの権利だから、おれがどうしようと勝手だということになると、地域は住むに値しない地域になってしまう。

やはり自分たちの目につく範囲は自分たちの生活圏だから、お互いに自分たちの生活圏を守る口出しは、地域に住む者として当然すべきだと思う。そういうことをすることが、私たちの地域づくりだと思っている。

また、これは湯布院という田舎の温泉町の先進事例だ。ちょうどうちの町と同じころに、2人の青年が町に帰ってきて、わずか30年足らずで、ひなびた温泉町が、大分県の玄関口に変わってしまった。

隣の別府との境界のところに、湿地帯があったが、ここに昭和30年代の終わりごろ、ゴルフ場をつくるという話があった。この2人が、町の中に10人の同調者を集めて、大反対運動を展開した。日本全国で、自然を守ることでは、彼らが一番最初の運動だったと思う。その湿地帯は、現在まで残り、大分県の貴重な財産となっている。彼らは、そのときに住民運動の強さとノーハウを身につけた。

以来、ずうっと一貫してすばらしい町づくりをしてきている。つい最近も国道の陸橋が

あり、建設省が赤の色を塗ってしまった。住民たちは、うちの町の風景と合わない。とうとう色を塗りかえさせてしまった。その力がまさに湯布院の力だと思う。

私たちが今農業を地域で進めていく中で、農業だけの視点で農業を守ろうと思っても無理だ。あらゆる角度から、そういうすてきな町並み、色、自然の風景、あるいはすてきな人間関係を守る。農村には、人間味を帯びたすてきな一面と、また、非常に負担になる一面もある。環境も、すてきな農村で住む人間関係とでどうあるべきかと、そんなこともこれから考えていかなければならない。

島添 地域との関係について、例えば今回の開発なんかをやるときに、地域全体の最大公約数をどこでとるかという、このままじゃ阿東町は大変だ、何とかしなきゃいけない、せいぜいそこまでだ。それから先、何をやるうということと言い出すと、やはり出るくぎは打たれるというところがある。

ただし、いろんなことはあっても、つぶしにかかるほどの元気も、周りにはない。

少しずつ少しずつ、常に絶えず切れることなく、周囲に対して、自分たちはこういうことをやろうと思っている、これから発展して、地域にこういうことが起こるとやっていく。そのうちに、変わってくる。今回の話も、周囲に無視される関係がずうっと続き、それがどこでひっくり返ったかという、一つは、やっぱり朝日農業賞をいただいたことだった。しかも地域との連携という部分でいただいたというのが、地元に対しては非常なショックだったらしい。

また、今度はポスト新農構の話がおりてきて、これは周囲の人たちの想像を超えた規模だった。こうなると、もう悪いことを言わない。じいっと見ていて、もしかしたらここで何か言っちゃうと、自分だけ列車に乗りおくれるんじゃないかという意識が出始める。きのうなんかでも、地元での株の集まり方を聞

いてると、参加しない方が乗りおくれみたいなの雰囲気ができ上がっているみたいだ。

多分それは、中身を認めてくれたというのとは少し違う。ただ、今までは、何を言っても素通りだったものが、こちらに関心を持ってくれている。少なくとも関心を持ってくれていれば、あとは、私たちが何をすればいいかということになる。

彼らの目の前でもうけてみせればいいのかと思う。決して指導するでもなく、村のイメージが、一つの方角へ走り出すだろう。

村というところは不思議なところで、動かないときには何一つ動かない。動くときには全部一遍にどっといく。あとはきっかけだけだろうと思う。

中島 檜原村というのは、東京都心と非常に近い距離にある。地方に比較して、村民の人は欲がないという面もある。やっぱり発想的にはすべてマイナスかな。村の中の催し物でも遠いとよく言われる。社会教育として成人教育のスケジュールを作って優秀な人を呼んでみたけれども、だれも集まらない。しょうがないから、何とか来てよといって村人を集める。義理で来たものだから、話も聞いていないという感じ。

それで村自身、非常に暗いイメージだったけれども、最近はだんだん変わりつつある。

私が住みついたころは、やはり若者は消防活動。消防というのはきちんとやって、制服を着て「よいしょ」とやるような、ああいう消防活動と、中年はソフトボール。

私も、ソフトボールで急にみんなの中へ入った。じゃすぐ出るよと言って、土曜日に住民票をぱっと移して、日曜日に試合に出た。「あいつはだれだ」という話になった。それからは非常に親しみがでてきた。

外から来る人間は、やっぱりいい意味で宣教師だ。何か情報を提供しなければいけない。いつも会う人には自分の今いる姿はタイムスリップして、本当の姿じゃないんだよ。もっ

とちゃんと本当の姿に早く戻ったらということをして、口癖のように言っている。

一晩にして金鉾を掘り当てたというのが、アメリカンドリーム。日本人の発想だと、金鉾を掘っていたらすぐ悪いやつだとか、金もうけは悪いやつという話になる。そうでなく、何か自然を生かして、すごいものができるんじゃないか。まだ檜原村では、すぐ目先のお金にとらわれている。大きな自然があるのに、もっと将来に目を向け、孫子の世代で採算がとればよいという発想が必要かと思う。

加賀谷 あきたこまちだとか、果樹だとか、野菜について、今私たちの方では、有機栽培とか、低農薬だとかに非常にまじめに取り組んでいる。その取引先と言えば、生協とか、そういう人方が来る。そんなつながりの中で、村なり、農家なりの家事みたいなものを、逆に都会の人から、皆さん、そんなにじめじめしないで、もっとやったらどうだとか、子供を考えたり、長い目で見ればいいんじゃないのかとか、聞かせられる。

同時に、農家なり、あるいは村の状況なりも変わった。若い人が、一度は出ていきたいと言えば、その子供たちに対して、そういう人方からよく聞いて、話し合いに持っていける。

そういう意味で、食べ物を通じていろいろな知識、あるいは考え、思想、そういったものの交流が始まっている。

○ 農山村、特に山村に入ってみると、高齢化などに対応して、先のグリーンサービスのような事例にいきあたる。個別経営を超えた農作業等をサービスする新しい企業体づくりをもう少し積極的にやる。行政もその受け皿づくりを推進するのはどうか。

矢幡 核心に触れる問題だ。一番の課題はこれから時短の問題だろう。現に私たちの地域でも、就労の場はあっても、若い人たちは都市へと出ていく。それは、ただ単なる所得の問題ではなく、もっと自由な時間が欲しい

から。

そういう流れは早くから察知して、8年前から週休3日の農業をやろうという提案をした。ところが、それをやろうと思えば思うほど、仕事が忙しくなって、逆になった。しかし、今それを辞けて通ることはできない。

週休3日にして、収入を減らして休みをしたのでは、その休みのときの有効な余暇の利用も限定されてしまう。収入はふやしながら、休みをとる方法はないのか。やはり農家の方々の経営力を身につけなければいけない。

大体1人が農業粗生産をするための金額は、平均したらせいぜい600、700万円だろう。2人の労働力で、年間2,200、2,300万が限度だ。

週休2日なり、3日なりを進めていく中で、僕らは、いい物をつくることはできる。ただ、一番手間がかかり、付加価値を生むのは、商材を商品にする過程だ。

その手間のかかるところをほかの面で補う。12、13年前から、うちの町は農協にタスク制度という制度を設けている。常時、女性の方を5人ぐらい抱えていて、急に冠婚葬祭とかで手が要るときは、そのタスクの係にお願いする。すぐに回してくれるというシステムになっている。

週休3日農業というのは、それだけでもできない。隣に人口7万の日田市がある。その団地の中に、うちの農産物の選果場をつくらうという発想を、進めている。作ったものをそこに持って行って、朝10時ごろから3時ごろまで、それをパッケージする。

ところが、ここ1、2年前から大変な好景気で、その発想も、いざ実施の段階になると日田市でもなかなか人が集まってくれない。今は自分たちの周りで、人を当てにすることができないような状態になってきた。合理化も徹底的にしなければならないが、ある面では、ほかから労働力を借りるシステム化も、図らないといけない。

また、20数年前から、20代、30代の剪定の技術者の集団をつくって、30人ぐらい登録をしている。たしか1日1万円の日当を払うようにしている。5、6人のグループで、あっという間に手間の出ないところの剪定はしてもらえる。

加賀谷 企業的な面の芽が一つあったということで紹介した。非常に注目されている。それを一つのモデルなり実験にして、これから秋田県では、ある程度ふえると思う。

ただ、今の段階で、会社じゃないけれどもその地域、集落を抱えて、私たちがやるんですよ、お任せしなさいという形のものはかなり多い。

もう一つは、隣近所とか、あるいは村を越えて同級生だとか、親戚間の作業の受委託みたいなものは、いろんなケースが生まれてきている。

企業的なものが非常に望ましい。これは言えるし、まだこれからふえると思う。ただ私たちは、今まで秋田県で集落を一つ、一農場という形で、お互いに助け合いながら、機械も共同で、そして余った労働力では、ほかの作目を入れましょうという形でやってきた。その反省に立って、会社組織にするいろんなケースがあってもいい。が、余りたがをはめない方がいい。こうでなければだめだ、そうしないと、助成もしないし、応援もしないとなれば、今度は無理してそれを売るために、背伸びして滑ってしまう。結局、それが金の切れ目が縁の切れ目になったり、人間関係を阻害させる。

今は過渡期なものだからいろいろなケースをたくさん出す。その中で、さらに自分たちがやる気を起すには、何が必要か、あるいはどこに手を差し伸べればいいかが、重要だろう。これから自主性を尊重してやらないと、また急いでやらないとできないんじゃないかな。

所 外 出 席 者 名 簿

駐村研究員		矢 幡 欣 治
		島 添 美葉子
		中 島 保
		加賀谷 多 吉
		大 場 茂 夫
		白 川 悦 男
農林水産大臣官房 参事官		山 口 勝 朗
官房企画室	特定政策調整室長	高 濱 正 博
		山 岡 和 純
統計情報部	経済統計課 課長補佐	小 川 勝
	課長補佐	西 尾 昭
	経営類型統計係長	長 井 優
	農林統計課	橋 詰 登
構造改善局	農政課	小 林 宏 一
	地域農業対策室	塚 田 浩 徳
農蚕園芸局	企画課 企画官	森 直 己
	農産課 農蚕園芸専門官	中 村 利 男
	生活改善課 事業係	岩 田 知 子
農林水産技術会議	研究管理官	松 原 茂 昌
農業研究センター	経営管理部 研究員	千 田 雅 之
農業環境技術研究所	環境管理部 農村景域研究室長	田 中 隆
	主任研究官	石 田 憲 治
	研究員	網 藤 芳 男
(社)全国農業構造改善協会	企画業務部長	大 柿 一 成
	企画業務部次長	高 橋 威
(社)農村開発企画委員会	常務理事	井 上 崇 司
	常務理事	大 脇 知 芳

	研究員	柴 田 雅 敏
(社)地域社会計画センター	参与	山 幸 夫
(財)農政調査委員会	事務局長	小 山 義 夫
	国内調査部長	吉 田 俊 幸
	研究員	池 本 良 教
農林中央金庫	調査部	磯 田 健 彦
酪農事情	編集長	小 松 厚 子
	記者	田 村 判 子
(株)グリーンヒル ATO	社員	島 添 哲 也